

所蔵作品展も多彩です！

2010年01月14日

企画展の陰に隠れがち(?)な所蔵作品展ですが、当館では「常設展」という言葉を避けて、企画展ごとに大幅な展示替をしています。今年度最後、第5期の見どころをご紹介します。

幸い「大ローマ展」のお客様は7割以上が所蔵作品展もご覧です。入口でお迎えするのは、19世紀末のアカデミー系画家が古代ギリシアへの憧れを描いた作品。ギリシア・ローマ文化の光が近代にも輝いていることを感じいただけるでしょう。



↑エドワード・ジョン・ポインター 《世界の若かりし頃》1891年

展示室4「日本画—冬から春へ」

新年は日本画から。戦後から平成にいたる作品で、冬と春の風物を題材にしたものを集めています。

雪景色から桜までの季節感とともに、作者や年代による日本画表現の変化をご覧いただきたいと思います。1978年作の山本丘人《幻雪》は、写生画のようでありながら雪景と満開の梅が両立し、さりげなく松竹も組み合わせています。

今回は展示室8の木村定三コレクションでも「京都の近代日本画壇」を特集。こちらは明治から昭和前半までの掛軸を主としています。



↑山本丘人《幻雪》

展示室5 20世紀の絵画

一番大きな展示室はコレクションを代表するクリムトやピカソから始まりますが、今回は特に抽象絵画をみる楽しさをお味わいいただきたく、20世紀後半からのスペースを広くとりました。絵具を盛上げた材質感や大きな色面の力が空間に広がっています。

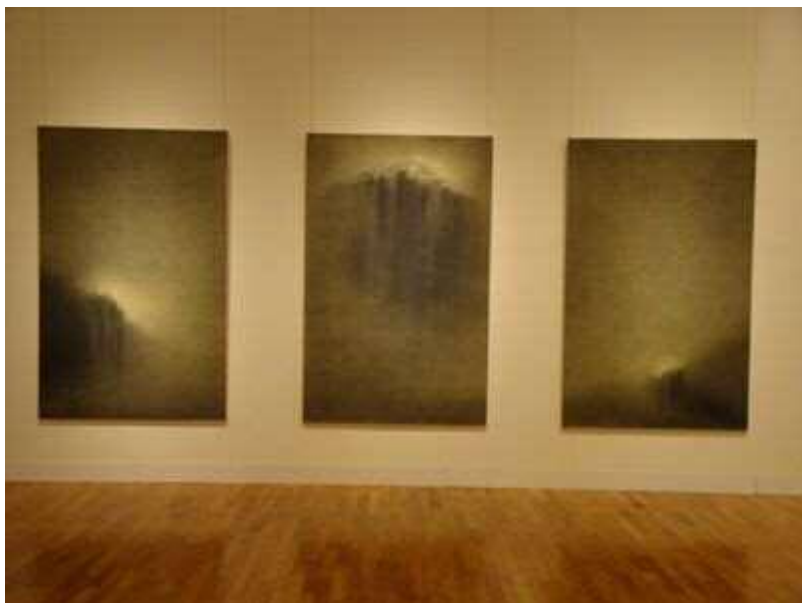


↑ 展示室 5 後半部

昨年度に収蔵した現代日本の大型絵画 3 点を初披露。吉田作品の黒は黒鉛の粉末を手指でなすりつけて描いたもの。野田はキャンヴァスを 2 重に張り、黒っぽい形は画布を切って三角形に折り返しています。絵に近寄ってもご覧ください。



↑ 吉田克朗《触 “湖底” ?13・14》(1992)と野田裕示《WORK-984》(1995)



↑ 中上清《無題》(2007)

遠山や雲の向こうから光が射してくるような幽玄な空間に、多くのお客様が足をお止めです。

展示室6 渡辺豪[白い話 黒い話]

あいちトリエンナーレのイベント「現代美術の発見」第6回の渡辺豪さんはコンピュータ・グラフィックによるアーティスト。恋愛感を話す女性の声に、唇や髪も白いCG女性の動画をつけた《emo》と、暗闇から浮かび上がる書棚の本の背表紙による作品が、不思議な世界へ誘います。



↑ 展示室6 渡辺豪[白い話 黒い話]

展示室7 「写真—芸術家たちの姿」

美術作家の顔って案外知られていないもの。右からフランシス・ベーコン、ピカソ、ヘンリー・ムーア、ジャスパー・ジョーンズです。『ヴォーグ』誌で有名だった写真家アーヴィング・ペンが撮った芸術家たちはカッコいいですね。日本の写真家安斎重男や大辻清司が1970年の第10回東京ビエンナーレなどを撮った写真も、あいちトリエンナーレへの期待を盛上げてくれます。



↑展示室7 「写真—芸術家たちの姿」

16日（土曜）11時から森美樹学芸員による所蔵作品展ギャラリー・トークがありますので、ぜひご参加を。

（TM）